

銭形平次捕物控

鈴を慕う女

野村胡堂

青空文庫

一

「八、あれを跟^つけてみな」

「へエ——」

「逃がしちやならねえ、相手は細^{こま}かくねえぞ」

「あの七つ下がりの浪人者ですかい」

「馬鹿ツ、あれはどこかの手習師匠で、仏様のような武家だ。俺の言うのは、その先へ行く娘のことだ」

「へエ——、あの美しい新造^{しんぞう}が曲^{くせもの}者なんですかい。驚いたな」

「静かに物を言え、人が聞いてるぜ」

錢形の平次と子分のガラツ八は、その頃繁昌した、下谷したやとくぞの徳蔵ういなり稲荷に参詣するつもりで、まだ朝のうちの広徳寺前を、上野の方へ辿たどっておりました。

「ガラツ八、よく見ておくんだよ、心得のために話しておくが——」

「へエ——」

平次は一段と声を落しました。

「武家はちよいと怖い顔をしているが、よくよく見ると顔の造作の刻みが深いというだけのこと、まことに人相に毒がねえ、——牙のある獣に角つのがなく、角のある獣に牙がねえのと同じ理窟で、あんな怖い顔をした人間は、十中八九は心持のいいものだ。とこ

ろが本当の悪党とか、腹の黒い人間というものは、思いの外ノツペリした顔をしているものだよ。見るがいい、あの武家の袂たもとの先には、ここからでも見えるくらい、朱しゆが付いてるだろう、あれが手習師匠の証拠だ、子供の手習を直すとき朱しゆ硯すざりに袂の先が入ったんだろう」

「へエ——、するとあの美しい娘が悪人てえ証拠は？」

「あの娘と擦れ違つたとき見ると、袖そでの先に同じように赤いものが付いてるが、それは朱じゃなくて血だ。それにあの娘は広徳寺前で、袂から泥焼きのお狐様を落したろう」

「それは、あつしも見ましたよ。あれは徳蔵稲荷の門前で売つていますね。素焼きのお狐に泥絵具を塗つて、一つが十二文もん、あれ

は懷中へ忍ばせておくと、願い事が叶うとか言つて、手弄みをする手合がよく持っていますか——」

「それだよ、そのお狐を若い女が袖に忍ばせているのも可怪しいが、何かの機みで落つことすと、乾き切つた往来の上で尻尾が欠けた。——この通り」

平次はいつの間に拾つたか、内懷から尻尾の欠けた素焼きの狐を出して見せました。

「いつの間に拾いなすつたんで、早業だね、親分は？」

「馬鹿、静かに物を言え、往来の人が顔を見るじゃないか、——ところで、女が物を落すと、どんなに忙しい時でも大抵踏み止まつて一応は拾い上げるものだ。そして、役にも立たないことだが

——毀こわれたものなら、元の通り継いでみるとか何とか、どんなにつまらない物でも、それくらいの未練は持っているものだ、ところがあおの娘はどうだ」

「お狐おっこを落として、尻尾が欠けると、ちよいと振り向いたつきり、拾い上げようともせずにはサツサと行ってしまった——なるほど、こいつは可怪しいや」

「解ったか、八、あの女は馬鹿か豪傑か、でなければ腹の中に容易でない屈託があるんだ。それも並大抵のことではない、女が願まじないい事が叶うという禁呪のおコンコン様を捨てて行くのは容易じゃない」

平次の明察は、すっかりガラッ八を景氣付けました。

「ね、親分、この仕事をあつしに任しちや下さいませんか」

「何だと」

「八五郎の手柄初めに、根こそぎ洗い出してみせましょう」

「大丈夫か、ガラッ八」

「大丈夫かは心細いな」

「……………」

「第一、あんな吹けば飛ぶような新造を、錢形の平次親分とその一の子分の八五郎とで跟つけたとあつちや、世間の聞えもよくねえ」

「それもそうだな。万に一つの間違ひはあるまいが、あの娘を見失つちやならねえよ。俺は徳蔵稲荷へ行つて、お前の帰つて来るのを待っているから」

「有難^{ありがた}え、それじゃ任せて下さるんだね、親分」

「ドジを踏むな、相手が綺麗な新造だと思つと間違いだぞ」

「だ、大丈夫——」

ガラツ八は平手を額^{ひたい}にかざすと、平次に別れて娘の後を追いました。

二

平次が徳蔵稲荷へ行つてみると、果して思いもよらぬ大事件が待ち構えておりました。

神様にも流行^{はやり}廃^{すた}りで、今は跡形ありませんが、その頃大變

流行った徳蔵稻荷の門前は、何があつたのか、朝から黒山の人だかりです。ハツと思うと早足になって、人混みを分けるともなく顔を出すと、

「あッ、錢形の親分、ちようどいいところで」

町の口利きらしいのが、顔見知りと見えて、袖を引かぬばかりに案内してくれます。

「どうなすつたんです、これは？」

「大変な間違いがありましたよ、あれを見てやって下さい」
指したのは、ささやかな玉垣の下。

「あッ、これはひどい」

錢形の平次も思わず声を立てました。

人の死体や、残酷な場面は、嫌いだといつても随分たくさん見て来た平次ですが、まだ、こんな変つたのは見たこともありませ

ん。
真新しい紅白の鈴の緒で縛り上げられた中年者の男が、二た突き三突き、^{あいくち}ヒ首で刺されて、見るも無^む慙^{ざん}な死にようをしているのです。

「銭形の親分、この通りだ。これは堂^{どう}守^{もり}の仁^に三^さ郎^{ろう}といつて、町内の人気者だ。人に怨^{うら}みを買^かう性^{たち}の人間じやない、金を溜めるような心掛けの男でもねえ、それがこんな虐^{むじ}たらしい有様になつて、朝^{あさ}詣^{まい}りの人に見付かつたんだ。何とか敵^{かたき}を討^うつてやつて下さい」

「へエ——、大變な事をする奴もあるものですね。玉垣の前で堂守を殺すなんて、随分罰ばちの當った話じゃありませんか」

平次はそう言いながら、一と通り死体を検しらべましたが、四十五

六の岩がんじょう乗な男で、女や子供に縛られそうな柄ではありません。

朝といつても日中の事ではあり、たぶん当身か何か食わされて、

一度目を廻したのを鈴の緒で縛り上げられ、後で気が付いて口を利こうとしたので、ヒ首で滅多突きにされたものでしょう。

もつともまだ人通りも少ない時分で、死体は玉垣の横手の方にあつたのですから、夜が明けたといつても一と刻ときや半刻は、知らずに過せば過せないこともありません。何人目かの朝詣りの人が、拝殿に下がっている鈴の緒が引き千切れているのに気が付いて急

に騒ぎ出すと、間もなく玉垣の横、ちよつと人目に付かないところに、堂守の死体が転がっているのが見付けられたのです。

役人の見える前に、平次は忙しく四方を探しましたが、賽銭さいせん箱ばこの上に下がっている大きな鈴と、その鈴に付いた紅白の鈴の緒が千切り取られているほかには、何の変つたところもありません。賽銭泥棒どろ棒ぼうというのは、いつの世にもあつたもので、器用なのは鳥とり鵜もちで釣り、荒つぽいのは箱を打ちこわすのですが、見たところ、そんな様子は少しもありません。

「ハテ——」

銭形平次ほどの者も、思案に余つて双腕もううでを拱こまぬきました。

そのうちに、徳蔵稲荷の前は野次馬で一パイ。

「仁三郎が殺されたとよ」

「あんな仏様みてえな人間を殺す奴は、どんな野郎だろう」

「それに玉垣まで血で穢^{けが}してよ、罰の当たった畜生じゃないか、お稲荷様だつて黙つちやいなさるめえ」

こんな噂を平次はジツと聴いておりました。この事件には、余程深い奥がありそうです。やがて平次は、門前の土産物屋^{みやげものや}へ行つていろいろ尋ねてみましたが、朝詣りの客は土産物などに眼をくれないので、ツイ今しがた表戸を開けたばかり、何にも知らないという心細い有様です。

「十八九の美しい新造が、この禁呪^{まじない}のお狐を買つて行かなかつたかえ」

「へエ、そんな事もありましたでしょうが、なにぶん毎日二三十
ずつ売れるお狐様ですから、はつきり覚えちゃいません。場所柄
で芸妓衆や水茶屋の姐さん方がよくお買いになりますよ」
土産物屋のお神さんの記憶ははなはだ心細いものです。

三

「ちよいと、お兄いさん」

不意に、本当に不意に娘は立ち止まりました。お屋敷風とも町
家風ともつかぬ、十八九の賢そうな瓜実顔、どこかお侠なとこ
ろはありますが、育ちは良いらしく、相応に美しくも可愛らしく

もあるうちに何となく品があります。

「……………」

不意討を喰らって、ガラツ八は往来の真ん中に立ち^{すく}辣みました。秋が深いにしても、朝の光の中に^{うつとう}鬱陶しく^{ほおかむ}頬冠り、^{とうざん}唐棧を^{はしよ}端折って、右の拳で弥蔵をきめた恰好は、どう^{ひいきめ}鼻肩目に見ても、あまり結構な風俗ではありません。

「私の家はここよ、後を^つ跟けて来たんならもうお帰り」

「へエ——」

「何て間^{おおかみ}拔けな狼だろう」

「あッ」

虹のような^{たんか}啖呵を、ポカンとしている向う額に浴びせて、娘は

路地の中へ颯と消えてしまいました。おも影に立つ鮮やかさに、しばらくは後を追うことも忘れて、娘の言葉を噛み締めるように、ガラッ八は立ち止まりましたが、

「あッ、いけねえ」

路地へ飛込んだがもういけません。中は羊腸ようちようたる抜け裏、娘の姿は本当に虹のように蒸発してしまったのでした。

「畜生め」

大きく舌打を一つ、せっかく引受けた大仕事を縮尻しくじってしまつて、面目次第もなく、朝の元の大通りへバアと出ると、ちようど通りかかったのは先ほどの武家、——親分の平次が手習師匠に見立てた五十前後の浪人者です。

「この武家を跟^つけてやれ、新造の尻を追い廻すよりは、氣がとがめないでもいい」

勝手な独り言を言いながら、少しやり過して、件^{くだん}の七つ下がりの羊羹^{ようかん}色浪人の後から跟け始めました。それから大通りをしばらく行つて、路地を二つ三つ曲ると、とある路地の中へ。

「どっこい、今度は逃さねえぞ」

浪人者の踵^{かかと}を踏むように続いて入ろうとすると、今度もまた見付かつてしまいました。

「これこれ町人」

「へエ、へエ」

「先ほどから拙^{せつ}者の後を跟けているようだが、何か用事でもあ

るのかな」

「とんでもない」

おいはぎ

「剽盗泥棒ならあきらめて帰るがよかろう。この通り無禄の浪人者だ、一文も持合せがない、その上年こそ取っているが、拙者は腕が出来ているぜ、ハッハッハッハッ」

カンラカラカラと笑い飛ばすと、刻みの深い物凄い顔の紐が緩ひもゆるんで、群ぐんじょう青あおで描いたような青髯あおひげの跡までが愛嬌あいきようになり

ます。

「へエ、あつしは悪い人間じゃございません」

「そうだろう。その方の人相は、どう買い被つても悪人という相じゃない。鼻が反そつくり返つて、眼尻が下がつて、齒が少し乱らんぐ

杭いだな、そんな刻みの深い顔は、すべて善人か悪人にあるものじゃ」

「へエ——」

「悪人はもう少しノツペリして凄味があるな」

ガラツ八もうすっかり面喰らつてしまいました。

「親分もそんな事を申しましたよ、あの御武家は、ちよつと凄顔をしているが、きつと仏様のような方に相違ないって——」

「仏様は少し嫌だな、まあいい、ところで何の用事で拙者の後を跟けた、返答によつては許さんぞ」

「決して旦那の後を跟けたわけじゃございません。先刻旦那の前へ行つた、あの綺麗な新造が、どこへ行くかと思つて、ちよいと、

その――」

「馬鹿野郎」

「へエ――」

「お前のような馬鹿がいるから、若い娘が一人歩きも出来ないのだ。今日だけは見逃してやる、さっさと帰れ」

「へエ――」

ガラツハは全くさんざんな敗北でした。二三町スツ飛んで、浪人者が路地の中へ消えるのを待つて、近所の酒屋で聞いてみると、しらかわてつのすけ白川鉄之助という九州辺の浪人者で、大した金持という訳ではありませんが、くら生活には困らないらしく、別に仕官の途をみち求めるでもなく、毎日ブラリブラリと遊んでいるということでした。

「あの浪人者は、手習子を集めて、師匠をしているでしょうね」
 「いいえ、そんな話は聞きませんよ。身寄りも知^{しる}辺もない一人者
 で、時々ブラリと外へ出るほかは、珍^{ちん}糞^{ぶん}漢^{かん}糞^{ぶん}な本ばかり読ん
 でますよ」

「しめたッ」

ガラッ八は、それだけ聞くと、横つ飛びに徳蔵稲荷へ駆け付け
 ました。娘を見失ったのは、何といつても大失策に相違ありませ
 んが、その代り、あの浪人者を手習師匠と鑑定した、親分平次の
 失策も掴^{つか}んだのです。これなら五分と五分——いや七分と三分ぐ
 らいかも知れませんが、とにかく、親分のお小言も緩和されるだ
 ろうと思つたのです。

徳蔵稻荷の前へ歸つて来ると、黒山の人ばかり。

「ハイヨハイヨ」

野次馬を分けて入つてみると、玉垣の下、紅白の鈴の緒で縛られた堂守の死体を前に、銭形平次は腕を拱こまぬいて考えているところでした。

「親分、これはどうした事です」

「おお、八か、あの娘はどうした」

「入谷いりやまで跟つけて行つたんですが、恐ろしい八幡やわたの藪やぶ知らずの抜け道へ入り込んで、とうとう消えちまりましたよ」

「何？ 見失った？ 馬鹿野郎ッ」

「その代り親分、あの浪人者は手習師匠でないってことまで突き

止めて来ましたぜ」

「そんな事を誰が頼んだ、馬鹿ッ、向うへ行つてしまえ」

「へエ」

ガラッ八は、まことに滅茶滅茶です。

四

徳蔵稲荷の堂守殺しは、それっきり下手人が判りませんでした。錢形の平次は身一つに引受けて、いろいろ探索の手を費やしましたが、何としても解りません。

仁三郎は全くの一人者で、金も係累も、人に怨みを買う覚えも

なく、その上、さいせんばこ寶錢箱が無事で、取られた物といつては、拝殿の鈴だけ。これも仁三郎を縛るために、鈴の緒を引き千切った時、一緒に転げ落ちたのを、そのまま誰か拾って猫ばばをきめ込んだのかもわかりません。

しかしこの時代の迷信深い野次馬が、お稲荷様の拝殿の鈴を隠すというのも受取れないことです。

さては、鈴を盗むためであつたか――

フト平次はそんな事を考えました。しかし、やしろう社の拝殿の鈴などは、迷信的な気持に逆らつてまで盗むほどの物ではなく、第一小さい社はすっかり荒れてしまつて、最近一手に寄進する金持があつて、改造に取りかかるてはず手筈にまでなつていたのですから、古い

鈴などは、その時は自然新しいのと替えられるでしょうし、手順を踏んで頼めば、随分安く手に入らないとは限りません。どう考えても、人を殺してまで奪^とるほどのものではなかったのです。

それにつけても、あの娘を逃がしたのは、何という手ぬかりでしょう。子分思いの平次もこの時ばかりは、ガラツ八に半日も物を言いませんでした。袖の尖端^{さき}に血のついた娘——それも、間違はなくこの境内から出た女の行方^{ゆくえ}を、つまらない手違いから見失ってしまったというのは、何としたドジでしょう。

最後に残る手段は、鈴の行方を調べることです。平次はその日のうちに、あらゆる子分を駆り集めて、界隈^{かいわい}の古道具屋や堂宮を聞かせました。

「親分の眼鏡は曇らねえ、確かにありますぜ」

第一に飛び込んで来たのはガラツ八。

「何があつたんだ」

と平次、さすがに腰が上がります。

「近頃下谷中の古道具屋から、鈴を買い集めた者があるつて言いますぜ」

「本当か、八」

「本当か——は情けねえ、この足で歩いて、この耳で聞いたんだ。間違いつこはねえ、その上、堂宮の拝殿の鈴がチヨイチヨイ盗まれる」

「何だと」

「親分、こりやどこかに鈴を集めて謀反むほんでも企む奴があるに違えちげねえ——」

「馬鹿だなお前は、鈴が鉄砲玉めえの代りになるかよ——ところで、その鈴を買いに歩くのは男か女か」

「男も女も、武家も、町人もあるってことですよ」

「いつ頃から始まったことなんだ」

「なんでも半年ばかり前からボツボツあつた事だが、激しくなつたのは、この二三日だつてことですよ」

「よし、それで解つた、八」

「へエ——」

「手前、いつでも、親分のためなら命を投げ出すと言うね」

平次は少し屹ぎつとなります。

「言いましたとも、憚はばかりながら小判形の八五郎、金や命に糸目は付けねえ」

「糸目を付けたくも、金なんか持つちやいめえ」

「凶星ツ、親分の眼鏡は曇らねえな」

「幸い命だけは一つ持っているだろう、そいつをちよいと貸してくれ」

「お安い御用だ、他所よそ行きのですか、それとも平常ふだん使いのですか」
「馬鹿だな、お前は」

すべてこういった調子ですが、昔の江戸っ子は、こうした警句のために、自分の命ぐらいは何とも思わずに賭けました。

「誰にも言つちやならねえよ、俺達の知り合いから出来るだけ鈴を集めるんだ、——それから、熊や三公にそう言つて、まだ手の届かねえ場末から鈴を集めさせ、それを背負^{しよ}つて、手前しばらく鈴を売つて歩くんだ」

「そんな事なら何でもありやしません、やりますとも」

「血^{ちまなこ}眼で鈴を探している奴は、鈴で釣るより外に術^てはねえ」

「解りましたよ、親分、鈴でも半^{はんしやう}鐘でも売つて歩きますよ」

物事を単純に考えるガラツ八は、もうすっかり成功したつもりで飛出してしまいました。

五

その翌^{あく}る日、八五郎はすっかり鈴屋になり済まして、入谷から根岸の方へ流しておりました。万^{まんすじ}筋の野暮^{あわせ}つたい袷^{あわせ}に、手^{てつこう}甲^{てつこう}脚^{きやはん}絆^{はん}をつけ、置手拭^{おきずき}までした恰好は、誰に教わったか知りませんが、すっかり行商人の板についております。肩から小鈴の箱を^{あめや}飴屋さんに掛けて、両手には、大きい鈴を、新しいのと古いのと取交^さぜて、五つ六つずつ提^さげました。

「——エー、鈴はいりませんか、大きいのは拝殿の鈴から、小さいのは鉢^{はさみ}の鈴、腰下げからポツクリの鈴——新しいのもある、古いのもある。金の鈴、銀の鈴、真^{しんちゅう}鍬^{くわ}の鈴、銅^{あか}の鈴、——足^{あゆい}結^{けつ}の鈴、手の鈴、釧^{くしろ}の鈴、大刀の鈴、鈴鏡、さては犬の鈴、鷹の鈴、

およそ鈴と名の付くものなら何でもある——鈴は要りませんな

——

ガラツ八はときどき懐ふところを覗いて、仮名で書いて貰った口上書を
 弁慶読みにしながら、こういった声を張り上げました。猫の蚤取のみ
 りさえ触れ歩いた時代ですから、鈴売りなどは決して珍しいもの
 ではありません。

「チヨイと、鈴屋さん」

八五郎はときどき呼び止められて、猫の子の鈴、鋏の鈴などを
 売りましたが、徳蔵稲荷で盗まれたような、大きな鈴は誰も振り
 向いてはくれません。

翌る日、ガラツ八は根岸の奥へ入り込んでおりました。すつか

りもう板について、懷を覗かなくともスラスラと口上も言えるし、元手かまわすの鈴も相当売れますから、何だったら、このまま足を洗って、鈴売りになるのも悪くない——といったような暢氣^{のんき}な氣持になつておりました。

「エ——鈴屋でござい、鈴はいりませんか、手の鈴、足結の鈴、釧の鈴——」

と張り上げていると、

「ちよいと、鈴屋さん」

大家^{たいけ}の寮の裏手らしい黒板塀^{くく}の潜^{くぐ}りが開いて、若い女が小手招^{てのまて}ぎをしております。

「へえへえ」

「御新造様が鈴を御覧になりたいとおっしゃるよ、ちよいとここから入っておくれ」

「へへへへ」

誘われるままに、ヒョイと庭に入ると、後ろの潜戸はピシリと締められました。が、その機^{はず}みに振り返って見ると、呼込んだ娘というのは、三四日前、広徳寺前から跟^つけて、入谷で首尾よく撒^まかれた、あの袖の先に血の付いた袷^{あわせ}を着ていた娘だったのです。

「あッ」

ガラッ八は、思わず声を出しましたが、庭石に躓^{つまず}いたような振りをして誤^ご魔^ま化^かしました。様子はすっかり変っているし、手拭はよしわ^らか^むむ吉原冠^{かむ}りにしているし、たぶん俺とは気が付くめえ——といっ

た、相変らずガラツ八流の樂天的な心持で、娘の後に跟いて、寮の庭を廻りました。

「御新造様、鈴屋を呼んで参りました」

障子の中へ声を掛けます。

「御苦勞だったね、八重^{やえ}」

優しく応えて、秋の朝日の這^はいよる障子を開けたのは、二十二三とも見える、少し病身らしいが、恐ろしい美人、ガラツ八も吉原冠りの手拭を取って、思わずヒョイとお辞儀をしてしまいました。

眉の跡青々と妙に淋^{ほっそ}しく細りしておりますが、水際立った元禄姿で、敷居の上に桜貝のような素足の爪を並べて立つと、腰から

上へ真珠色の霞かすみが棚びいて、雲の上から美妙的な声が聞えるといった心持、ガラツ八は一ペんに降参してしまいました。

「下町には居るそうだが、この辺へ鈴屋が来るのは珍しいね。どんな品があるか、みんな見せておくれ、気に入りさえすれば、幾いくいいでも買つて上げるから」

「へエ——」

啞然あぜんとしていたガラツ八は、漸ようやく人心地が付くと、そそくさと鈴の箱を開けました。

しかしこの時、灯籠とうろうの蔭、木戸の後ろ、縁側の隅などに、幾人かの人間が、餌えさに狙い寄る猛獣のように、眼を輝かしているのに、八五郎少しも気が付かなかつたのです。

箱の中の鈴と、手に持った鈴と、洗いざらい縁側に並べると、八五郎を案内した美しい女中は手を挙げて合図しました。

「それッ」

四方から飛出したのは、ことごと悉く女。女中、小間使、お針、飯炊き、あらゆる種類を尽して、八五郎の八方からサツと飛びかかります。

「あッ、何をする」

と言ったが追い付きません。女と思って甘くあしらっている内に、風呂敷を被せて、帯紐で縛ってそのまま、物をも言わず奥へ担かつぎ込みます。

六

ガラツ八は出かけてから、もう三日帰りませんでした。錢形平次、さすがに放つてもおけません。

与力よりきの笹野新三郎を訪ねて訊くと、石原いしはらの利助りすけは堂守殺しの下手人として、徳藏稲荷の隣に住んでいる、やくざ者の仙吉せんきちを挙げたという話、これは賭博ばくちの元手に困つて、仁三郎の財布を狙つたものと見たわけです。

仁三郎の臍へそくり繰——そんなものがもしあつたとしたら、ろくに鍵も錠もない、仁三郎の部屋へ忍び込んで、何とかして奪とるのが本場で、賽銭箱の上に登らなければ取れない鈴の緒を引き千切つて、玉垣の下へ死体を投ほうり出しておくというのは、あまりに念入

りな頭の悪さです。

「そんなはずはございません、下手人は思いもよらぬ大物でしよう」

平次はそう言つて与力の役宅を出しましたが、さて、大きい口を利いたものの、手繰たぐつて行く手蔓てづるが一つもありません。

念のために下谷へ引返して、徳蔵稲荷の氏子総代うじこ——和泉屋いずみやという町内の酒屋の主人に逢つて訊いてみると、思いも寄らぬ新事実が挙がりました。

それは、徳蔵稲荷の建物はひどく古くなつたので、最近堀留ほりどめの穀物問屋で、諸藩の御金御用も勤め苗字みょうじ帯刀たいとうまで許されている、大川屋孫三郎おおかわやまごさぶろうが、全然新しく建てて寄進することにな

り、材木まで用意して、来春早々工事に取りかかる運びにまでなっているというのです。

それだけなら何でもありませんが、その上、古い堂宇は、信心のため孫三郎が申受け、御本尊を除いた一切の付属品と共に、根岸の寮の広い庭に移して、そのまま祀ろうという事に決っているという話なのです。

「賽銭箱から鈴の緒まで新しいのと代えて下さるそうで、氏子一同大喜びでございます。それにつけても、こんなに荒れたままで大川屋さんに差上げては、いくら何でもお気の毒だからと申して、玉垣と鳥居を塗ったついでに、木連格子きつれごうしだけは紅べんがら殻で塗っておきました。その矢先あの騒ぎで、本当に私どもまで、どんなに迷

惑したかわかりません。親分のお力で一日も早く下手人が捕まるように——と、氏子一同そう申しております」

和泉屋の主人の話を聞くと、平次の真つ暗な胸には、サツと一道の光明が射しました。

「有難うございました、いろいろ解りました。稲荷様の罰ということもありますから、そのうちには下手人も判りましょう、お喧しゅう——」

和泉屋を飛出した平次は、その足ですぐ根岸の大川屋の寮を目当てに行きました。まさかガラツ八の真似をして鈴屋になつて出かけるわけにも行きません。岡っ引にしては少し手堅い平常着ふだんぎのまま、まず三町四方もあろうかと思うような板塀の外をグルリと

一と廻りしてみました。

近所で聞いてみると、大川屋の主人というのは、働き盛りの四十男ですが、早く配つれあい偶を失い、先年吉原で馴染を重ねた華魁おいらんを請出して、親類の承諾を得て後添いに直しました。これが不思議と心掛けの良い女で、美しくも優しくもあつたのですが、なぶんの病身、堀留の本宅に置くわけにも行かず、根岸にこんな立派な寮を建てて、女手に飽かして住まわしてあるのだということでした。

その女は、お米よねといって、不思議に鈴の音を愛し、長い間に買い集めて家の中は鈴だらけ、召使を呼ぶにも食事を知らせるにも、いちいち鈴を鳴らすのだと聞いて、平次はすっかり有頂天になり

ました。

門を入って耳を澄ますと、なるほど秋の空氣に響いて、どこからともなく、床しい鈴の音が聞えて来ます。

「これだこれだ」

平次は独り言を言いながら、寮の玄関にかかりました。

七

寮の玄関には、大きい鈴がブラ下がっておりまして。その頃では珍しい試みで、なるほど「鈴屋敷」だと思いながら、二つ三つガランガランとやると、玄関の障子が滑らかに開いて、

「どなた様で——」

首をかしげたのは、忘れもしないガラツ八に跟けさした娘、な
るほど桃色の啖呵たんかぐらいは切りそうなお侠きやんな娘です。

「あッ、お前さんはやはり此家ここの人か」

「……………」

娘はサツと顔色を変えて、そのまま障子を締めそうにするのを、
「どっこい待った。俺はお上の御用を聞いている平次という者だ
が、お前さんには徳藏稻荷の仁三郎殺しの疑いがかかっている、
変なことをしちやかえって為にならねえ、黙って主人に取次いで、
どうして鈴を集めたか、仔細を話して明りあかし（証）を立てなきやア、
どんな事になるか判らないぜ」

平次の態度には、商売柄にも似ぬ、噛んで含めるようなもの優しさがありません。娘はハツと顔を伏せましたが、思い定めた様子で、

「しばらくお待ち下さいまし」

静かに奥へ消えます。

やがて通されたのは、さまで広くはありませんが、妙に小綺麗に片付いた寮の奥座敷、待つ間もなく、

「お待ちせいたしました。銭形の親分さんだそうで、ちょうどいい方にお目にかかりました。私は大川屋の配つれあい偶で、米と申しませす」

敷居際で静かに挨拶したのは、最早名妓といったおもかげ倅はありませ

んが、いかにも洗練された美しい女房振りです。

「面倒な駆引は抜きにして、早速承りますが、手前どもの八五郎という男——鈴売りに身をやつして参ったはずでございしますが、彼は^{あれ}どうなりました」

平次の調子は、平淡なうちにも一歩も^{かしやく}仮借せぬ厳しさがありませんでした。

「ハ、ハイ、あの方は、身分をおっしゃいませんので、全く敵の廻し者と思ひ込み、しばらくこの寮へ留まって頂きました」

「そうでしょう、——いやそう打明けておっしゃって下さると大変私もお話を申し上げよくなります。ところで、その次に伺いたいのは徳蔵稲荷の鈴の事です、あれは一体どうなりました」

平次の言葉は直ちに問題の核心に触れて行きます。

「あれは少しも存じません。先ほどお取次に出ました、召使の八重と申す娘に、朝夕あの鈴を見張りながら、お詣りまいをさせておきました。あの日行つてみると、鈴は紅白の緒ごと引き千切られ、玉垣の下には、鈴の緒で縛られた死骸があつたと申します。八重は気丈な娘でございますから、もしやと思つて死骸の近所を探したそうですが、鈴はやはり無かつたそうでございます。そのとき袂の先を少し血潮で汚したとか言つておりました」

お米の答は明快を極めました。眉の跡の青々とした明眸めいぼうの女主人は、さすが昔の全盛を偲おもばせて、年にも柄にも似合わぬ頭あたまのよさがあつたのです。

「そうでしょう、——あの娘に鈴の緒を千切れるわけもなく、氣が強いといつても仁三郎を殺せるはずありません。最初往来で擦れ違つた時は、袂の血を見て吃驚びっくりしましたが、仁三郎の死体を見て、これは女子供の仕業でないとわかりましたよ、お蔭でだいぶ眼鼻が付いて参りました」

こう言う平次の態度や言葉は、その人柄のように慇懃いんぎんで、世の常の岡っ引とはあまりに違つておりました。最初は多少警戒的な氣持で話していたお米も、次第に信賴しきる心持になつて、

「それから、どんな事を申上げれば宜しいでしょう？」

ツイこう言つてみるのでした。

「たつたこれだけの事を打明けて下さい。どうして、こんなにた

くさんの鈴を集めなすったか——、この鈴は何になさるつもりか、それから、八五郎を敵の廻し者と間違えたとおっしゃったが、その敵というのは誰か、それだけを聞けば、私の用事は済みます」

「ハイ、決して隠し立てはいたしません、何もかも申し上げます。父が生きていれば、どんな事があつても口外の出来ないことです。が、今ではもう昔話になりました」

お米は思い入った風情にこう申しました。

八

お米の父というのは、よしむらみちのじょう芳村道之丞というきりしたん切支丹侍で、し島

まばら

原の残党。一揆いっきが事を起す前に七人の同志と江戸に潜行し將軍

御膝元で事を挙げるつもりでしたが、島原の乱も案外早く平定し、

徳川の礎いしずえはいよいよ鞏固きようこで、瘦浪人やせの策動ではどうにもならな

いと解ると、七人の同志と相談して、散り散りばらになり、

芳村道之丞はその中心人物として、長い間一味の連絡に当っておりました。

その後、天草あまくさで習ったオランダ風の鋳かざりを応用して、精巧な鈴

を作ることを工夫し、芳村道斎どうさいと名乗って江戸中の好事家こうずかの人

気を集めました。が、名人業であまりお宝にはならず、年中貧乏を

看板に、女房一人、娘一人を養って事足れりとしておりました。

女房お綾あやが死んだ後は、その唯一の形見の金簪きんかんざしを鋳込いこんで

大きい鈴を作り、自分の仕事部屋に掛けて、朝夕清澄な音を楽しんでおりましたが、ある夜賊が入って、芳村道斎を斬った上、あらゆる鈴を盗んで行つてしまいました。

翌る日まで生きていた道斎は重い手傷にも屈せず「敵は河井かたき かわいり龍之介、敵は河井龍之介」と言い続けて命を落しました。

河井龍之介というのは、日ごろ父道斎と懇意にしていたこれと西国の浪人者で、たぶん父道斎が、島原の残党七人の連絡係をとめ、その所名前を書いているのを知って、奪い取ろうとしたのでしよう。島原の残党七人の所名前が判れば、強請ゆすつても訴人しても相当の金になったのです。

一人残された娘のお米は、悪者の手に掛けて吉原に身を沈め、

生来の美しさと賢さで、一時は全盛を謳うたわれましたが、縁あつて大川屋孫三郎に落籍ひかされ、今は何不自由なく暮しているものの、どういふものか身体が楽になるとかえつて気が弱つて、昔父道齋の作つた美しい鈴の音が忘れられません。

夫孫三郎の許しを受け、金に飽かして新古いろいろの鈴を買い集め、その中から、道齋銘のを探し出して楽しみにしておりましたが、不思議なことに、母の金簪を鑄込んだ、父の最後の傑作が見えません。

だんだん詮議しているうちに、誰の手を経てどうして売られたか、その鈴は徳蔵稲荷の拝殿にあることを見付け、鈴だけ所望するもの、稲荷様を騙だますようで気がさすので、社殿やしろを全部寄進する

代り、古い祠ほこらを何もかも申受け、この根岸の寮に移して、拝殿に掛けた父の最後の傑作——玲瓏れいろうたる名鈴めいれいの音ねに、朝夕親しむつもりだったのです。

「こんなわけでございます。親分、父親の作った鈴の音を慕う私の心持をお察し下さいまし」

長物語をおわったお米は、物悲しそうに平次の顔を振り仰ぐばかりでした。

九

「親分、これからどうなるんでしょうね」

とガラツ八。

「俺にも解らねえ、二日でも、女護にょごの島みたいな寮に引止められていたんだから、手前てまえも少しは智恵が付いたろう。何とかこの先を考えてみな」

「チエツ、雁字がんじがらめにされて、納戸ほうに投り込まれていたんですぜ。あんな恐ろしい女護ヶ島つてあるわけのもんじゃねえ、あの肥ふとつちよの飯炊きがまた恐ろしい力で」

「こぼすなよ、八」

錢形の平次と八五郎は、こんな事を言いながら、根岸の奥の寮を引揚げました。

入谷まで来ると、何を考えたか、平次は卒然として往来に立ち

停ります。

「ハッ、手前あの浪人者は手習師匠じゃねえと言つたつけな」

「何ですって？」

「あの騒ぎのあつた朝、広徳寺前で逢つて、お前が跟けて行つた武家だよ」

「へ、へッ、千慮の一失つて講釈師は言いますぜ、あの時ばかりは親分の鑑識めがねも曇つたね」

「つまらねえ事を言うな——こうつと、あの浪人者が手習師匠でないとする、あの袖の赤いのは朱じゃなくて紅殻べんがらだ」

「へエ——」

「徳蔵稻荷の木連格子きつれごうしは、紅殻を塗つたばかりだつて、和泉屋の

亭主は言ったね、——あの拝殿の鈴をむしり取るのは、賽銭箱の上に登らなきゃならねえが、足元が悪いから、鈴を取るとグラリと行く、塗り立ての木連格子に、袖や袂ぐらいは強く触るだろうじやないか」

「なある——」

「それに、大川屋の御新造は、父親を殺した河井龍之介というのは、生きていれば五十を越したはずで青髯の凄まじい、ちよっと怖い顔をした男だと言った」

「へエ——？」

「さア、来い、ガラツ八、手前にとつちや怪我の功名だ。その浪人者の家へ案内しろ」

「親分、こうお出でなせえ」

一〇

二人は宙を飛んで白川鉄之助と名乗った浪人者の長屋へ駆け付けました。ソツと格子から覗くと、家の中は鈴だらけ、主人の鉄之助は、障子に漏れる秋の陽ひの中にいい心持そうに昼寝をしています。

「今日は、今日は、御免下さい」

八五郎が格子を開けると、

「河井龍之介、御用ッ」

錢形平次が飛込むと一緒にした。浪人者はさすがに身だしなみで、引付けてある一刀を引抜き、

「何をツ」

真つ向から向つて来るのを迎えて、ピユツ、ピユツと、平次得意の投げ錢、一箇は刀を抜く拳を打ち一箇は眉間をしたたかに打ちました。

「あッ」

とたじろぐところを、折重なつて、ひしひし 犇々と縛り上げます。ガラツハも人柄相応に馬鹿力があるので、こんな時は存外役に立つのでした。

*

河井龍之介の首は、間もなく鈴ヶ森に梟さらされました。

堂宮の鈴を盗み歩いたのは、自分が道齋を殺したとき盗んで売った鈴の中に、島原の残党の所名前が書いてあることに気が付いたためでしたが、お白洲しらすでそんな事を申立てても、もう上役人も相手にしてはくれません。一つは河井龍之介の家から没収した鈴に、そんな所名前などを書いたのは一つもなかったからでもあります。

もつとも、徳蔵稲荷から盗んだ鈴だけは、そつと銭形平次の手から、お米の手へ返してやりました。その鈴を二つに割ると中に

は細々と何やら書いてありましたが、平次はもとよりそんなものを読もうともしなかったのです。

後日その事について、与力の笹野新三郎に訊かれた時、平次はケロリとして、

「今頃島原の残党が、二人や三人ヨボヨボになって江戸に居ることを詮索したところで、何の足しになりました。それより大事なことをお耳に入れておきますが、河井龍之介を捕えた手柄は、この平次ではなくて、ガラツ八の野郎でございますよ。あの男はなかなか馬鹿じゃございません、おついでのと看襲めてやって下さいまし」

こんな事を言っておりました。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（八）お珊文身調べ」嶋中文庫、嶋中書店

2004（平成16）年12月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第六卷」中央公論社

1939（昭和14）年4月16日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1931（昭和6）年11月号

※初出時の副題は「鈴を恋う女」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：北川松生

2018年1月27日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

鈴を慕う女

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>